



辻井伸行  
ピアノリサイタル



2009年3月21日(土)

浦添市てだこホール

主催・琉球新報社



(c)Yuji Hori

## 主催者あいさつ



本日は辻井伸行ピアノリサイタルにご来場いただきまして、ありがとうございます。  
今回、お招きしました辻井伸行氏は、幼いころから音楽に親しみ、2歳3カ月のとき、おもちゃのピアノで、はっきりとしたメロディーで「ジングルベル」を奏でたという逸話のある、才能あふれるピアニストです。

10歳でオーケストラと共演し、ステージデビュー。すでに海外での活動も多く、2005年には最年少の17歳でショパンコンクールに出場し、ポーランド批評家賞を受賞したのは、皆さんご存知の通りです。目が不自由でいらっしやいますが、それを越えた表現豊かな演奏は、多くの方々の絶賛を浴びています。

沖縄では今回が初めてのリサイタルになります。多くのクラシックファンが辻井氏の来県を待望していたに違いありません。主催する琉球新報社としても、この上ない喜びです。

本日の演奏会にご協力いただきました、コンサートイマジン社をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。ご来場の皆様、辻井氏の奏でる音楽の世界を心行くまでご鑑賞ください。

2009年3月21日  
琉球新報社代表取締役社長 高嶺朝一

## 辻井伸行 プロフィール

*Nobuyuki Tsujii, Piano*

- 1988年 東京生まれ。20歳。
- 1995年 7歳で全日本盲学生音楽コンクール器楽部門ピアノの部第1位受賞。
- 1998年 10歳の時、三枝成彰スペシャルコンサートで、大阪センチュリー交響楽団と共演しデビュー。
- 1999年 11歳で全国PTNAピアノコンペティションD級・金賞を受賞。
- 2000年 12歳で、第1回ソロ・リサイタルをサントリーホール小ホールにて開催。  
以後、佐渡裕ヤングピープルズ・コンサート(02年)、東京交響楽団(02年)、読売日本交響楽団、(03年)等に出演。すでに海外での活動も多く、アメリカ(カーネギーホール・ワイルリサイタルホール)、ロシア(モスクワ音楽院大ホール)、チェコ、台湾などで演奏。2002年にはパリで佐渡裕指揮、ラムルー管弦楽団との共演を果たす。
- 2005年 ワルシャワで行われた第15回ショパン国際ピアノコンクールに最年少で出場、「批評家賞」を受賞。
- 2007年10月 エイベックス・クラシックスより初アルバム「debut」を発売。
- 2008年1月～3月、初の全国ツアーを開催、東京ではサントリーホール大ホールにてリサイタルを行い、大成功を収める。その様子は「報道ステーション」で放送される。また東京サントリー公演は、DVD化され発売中。
- 5月 指揮者・佐渡裕氏の推薦で、テレビ朝日「題名のない音楽会」に出演。
- 10月 佐渡裕氏とともにドイツにて、ベルリン交響楽団と2ndアルバムの録音を行い、CDとDVDを発売。
- 現在、横山幸雄氏が教鞭と執る、上野学園大学演奏家コースに在学中。



# Programme



## ショパン 12の練習曲 作品10

---

ショパンは練習曲「エチュード」と名の付く作品を27曲残している。一般によく演奏される作品10の12曲、作品25の12曲に加え、遺作の「3つの新練習曲」である。練習曲には、指使いの訓練的要素を含む曲と、非常に高度な技術と多彩なハーモニーを聞かせるための練習曲と2種類あるが、この曲は後者。ショパン特有の美の世界を確立した作品で、1829(19歳)~33年に作曲され、フランツ・リストに献呈された。

第1番は音程を広げたアルペジオの練習。第3番は「生涯でこれほど美しい旋律を書いたことはない」とショパンが語ったという「別れの曲」。第5番は右手による主旋律の全てが黒鍵によって演奏される「黒鍵」のエチュード。第12番は、故郷ワルシャワがロシア軍により鎮圧されたことにショックを受け書いたといわれる「革命」。これらの曲は後々にこのようなタイトルが付けられるほど、特によく知られているが、第1番から第12番までそれぞれ豊かな音楽性、芸術性を兼ね備えた価値ある音楽作品となっている。

## ～ 休 憩 ～

## ベートーヴェン ピアノソナタ第29番 変ロ長調 「ハンマークラヴィア」作品106

---

ベートーヴェンの32曲のソナタ中、最大・最長の規模で書かれた曲。第一楽章はソナタ形式、第二楽章はインテルメッツォ風のスケルツォ、第三楽章は瞑想的で長大なアダージョ、そしてラルゴの導入部があり、早いテンポのフーガ続く第四楽章という4つの楽章から構成されている。「ハンマークラヴィア」とは、19世紀初頭のピアノの旧称。初版楽譜のタイトルページに「ハンマークラヴィアのための大ソナタ」と記されていたことから、この名称が定着している。

第三楽章だけでも優に20分近くあり、ピアニストにとっても超難解な曲と知られている。ベートーヴェン自身「50年も経てば、この曲は理解され、弾かれるようになるだろう」と言い遺していることから、作曲当時は演奏不可能だったことがうかがえる。

1818年(48歳)の晩年に作曲された曲で、聴覚が著しく衰えた頃の作品。しかし、このソナタを生み出した後57歳で亡くなるまで、堰を切ったように傑作群がこれに続くように生み出されている。まさに、後期の頂点へと駆け上がっていくきっかけとなった作品と考えられている。

---